
お馬鹿な二人のトキメキ妄想パラダイス 3

三亜野 雪子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

お馬鹿な二人のトキメキ妄想パラダイス 3

【Nコード】

N5035E

【作者名】

三亜野 雪子

【あらすじ】

やってきました第三段！今回は少しだけ甘めで…。

今日は3回目のデート。

毎日私はドキメキですわ。

理想通りのデート、そして……きゃっ

今日もらぶらぶしましょ、啓太様

今日は3回目のデート。

いつも僕はドキドキだ（ある意味で）

今日も平和に、だけどそれなりに恋人らしい時間が過ごせますように。

お久しぶりです。また、やってきましたこの2人。今日は3回目のデート。今回はそれなりに気を遣って目的地をあらかじめ決めておいた。

彼、佐藤啓太は待ち合わせの場所でそわそわしながら彼女、白鳥ゆりを待つ。

「啓太さまぁー！」

様付けで呼ばれるのは中々慣れない。しかも、今回は街中だ。ゆりの方へ顔を向けるものの、周囲に人がいないか確認する。やはり笑われていた。

「お待たせしました」

「いえ、大丈夫です。行きましょう」

につこりと笑う彼女に体温は急上昇だ。今日はまた一段と目立つ服を着ている彼女。薄いピンクの上着の下から青が薄くかった白いワンピースが伸びる。それは膝より少し上くらいの長さで、どれもひだやレースが付いている。

「あの、手を貸してもらえますか？」

「あ、はい」

彼女の靴は赤く、10センチほどのヒールが付いている。そのため、少し歩きずらいのだろうと何の疑いもなく手を差し延べた。

こ、これはっ！

恋人繋ぎですわ

さり気なくやれて…私、幸せ。

はあ、こんな街中で一緒に歩けるなんて、ふふふ。

今日は3回目。そろそろ啓太様も…きゃ

また妄想の世界に入るゆり。啓太はそれにまた緊張のため気付かない。

今日の目的地は恋人なら一度は行くだろうと思われる映画とお茶。そんな簡単な内容だ。提案したのは一応啓太。と、いうよりもゆりの提案は遠回しに却下されたのだ。

『啓太様、恋人といたらやっぱりダンスですわね！それとも、軽井沢のカフェでお茶でも致しましょうか？あ、バラの庭園で散歩でもいいですわね』

一体何処に行くつもりなのか。

啓太の提案となるとゆりは嫌がることなく快く承諾。

よかった、提案して。

思い出して苦笑する。彼はやっと落ち着いてきたのか、握った手のことを忘れて隣りのゆりを横目で見える。

「今日もゆりさん可愛いですね」

照れながらもしっかりとその言葉を言う。ちなみに周囲にいた不幸な人達はその様子と言葉に内心で砂を吐いている。しかし、肝心な彼女は無反応。不思議に思って首を傾げると彼女の顔はとてもにこやかだ。

映画なんて大胆ですわ。

でも、そんな彼だから私は愛してしまったんですね。

ふふ、これは確信ですわ。今日こそは……私の初めてを。

「照れますわぁ」

よかった、届いてた。

いや、届いていない。

そんなこんなで2人は映画館へと到着する。

「どれを見ますか？」

「もちろん、“世界の愛をひとりじめ”ですわ！」

「は、はぁ」

一体どういう内容なのか、啓太はあえてそれを聞くこともせず

ケットを買い、中に入った。時間になり、館内の照明が落とされる。

うふふ、萌えますわぁ。

間もなく上映されるその時も、彼女は妄想に大忙しだ。

一方啓太は今更未だに手を繋いでいたことに気づいて、体温が上限なく上昇中。喉が渴き、思わず一気飲み。炭酸だったせいで大きくむせて隣りに睨まれていた。

ちなみに映画の内容は2人共頭に入っていない。

約1時間半、2人はそれぞれバクバクの時間を過ごし、映画館を後にした。

決めておいたカフェでお茶を飲み、やっと啓太の心は落ち着きを見せる。

「えっと、楽しかったですね」

見てもいないのにとりあえず口にするこの言葉。しかし、彼女も深く考えず（というか、彼女も見えてはいない）同意する。

「はい！でも、ちょっと残念でしたわ」

「え？何がですか？」

だって、なかなか迫ってきて下さらなかったんですもん。

もつと、積極的になつてほしいですわ。
でも、まだお別れのチャンスが残ってますわ

「ゆりさん？」

「はい？ 啓太様」

理解できないほどの笑顔に啓太は苦笑した。だが、その可愛らしい笑顔に誤魔化されて、その時できた疑問はどこかに無くなってしまうた。

時間は瞬く間に過ぎ去り、既に時刻は18時過ぎ。最初の待ち合わせ場所に戻り、2人は立ち止まる。

「えっと、じゃあまた今度」

度胸のないヘタレな啓太は積極的になるところか、次の約束さえできない小心者。だが、いつも妄想で夢見る彼女はそれに気付かない。

「はい。また今度」

夕日が背景のこのシーン。^{バック}

ああ、何てロマンチック…。

ここで、やっと2人は永遠の愛を……………。

しかし、彼女が思うことはもちろん何も起こらない。啓太は名残惜しそうに微笑んでそのまま帰ろうと踵を返す。それに慌ててゆりは彼の裾を掴んで止めた。

「え？あ、何か？」

何だかものすごく不満そうな顔の彼女に啓太は焦った。自分が何か悪いことでもしたのかと。馬鹿な啓太はそれしか考えられないらしく、必死に彼女に弁解を始める。

「あ、えっと、すみません！俺、ゆりさんと一緒にいるだけでいっぱいっぱいで、もう、何も気のきいたことなんてできなくて…えと、えと」

「え…」

啓太様、そこまで私のことを愛してくださっているんですね。

それなのに私ったら、勝手に怒って。

そうですね、彼は年下でオクテな可愛いお方。

多少意味の違いがあるが、まあ元は合っているのでは流しおこう。

ゆりはにっこりと綺麗な笑みを彼に向ける。怒っていないことに気付くと、啓太はほっと胸を撫で下ろした。

「じゃあ、次は頑張つて下さいね」

ぐいつと掴んでいた裾を更に引っ張つて、啓太を傾かせる。されるままになつてゐる啓太はじつと近づいてくる彼女の顔を見つめた。

夕日が背景で、^{バック}

私からする誓いの口付け。

そんなシチュエーションもロマンチックですわ

そんなこんなでゆりの最大の目的は一応達成されて、3回目のデートは終わりを告げたのだった。

今日はどうしても幸せな1日でしたわ

でも、やっぱり最後は彼に……………きゃ！

次の時は彼に迫ってもらえることを願つて。

あ、あと次のデートはやっぱりバラ園でお茶ですわね ふふ。

今日の3回目のデートは、やっぱりドキドキ（ある意味）で、大変。だけど、いいこともあって、まあ……………幸せ？かな。でも、次からは（恥ずかしいから）人気のない場所でやろう。

（後書き）

お久しぶりのこの2人はいかがでしょうか？もう、ゆりの妄想を考えるのが大変で大変で、だから今回はちょっと甘い方向に考えました（戦闘結果です）

一応未だに5まで書く気ではありますが、もしかしたら4で終わる可能性もあります。まあ、4は書くので、それもできればよろしくお願いします！

ではでは、お見苦しいお話をお見せいたしました。水でも飲んで気持ちを落ち着かせてからまた違う話でも読んでください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5035e/>

お馬鹿な二人のトキメキ妄想パラダイス 3

2010年10月22日00時50分発行